

偽物なんかじゃない

冬夜の時雨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私だってアイツが好きなんだ。
分かっているの。

目次

偽物なんかじゃない

きつと。

きつと既に。

照れくさいけれど正直に言うしかない。

「私はあのモヤシが好きだ」

「いつちよ前に殴ったり。

からかったり。

ラブコメっぽいこともした。

恋だった。

初めての。それこそ本物の恋。

アイツには好きな人がいるのだ。

アイツが傍に立ちたいって思っている人がいるのだ。

そして、彼女もアイツのことが好き。

でもね。私にはニセモノでも。

それでも恋人っていう関係を持ってしまうている。

容易に近づけない関係よ。

それなのに。それなのに彼女は。

彼女たちは臆することなく近づいていく。

初めての恋。

叶わないのだろうって分かってしまった。

諦めたかった。

いや。諦めたはずだったのだ。

なのに。笑うしかない。

どうやら本気の本気で好きみたいだ。

最悪の気分だ。

なんでアイツなんか。

モヤシ野郎で、おちやらけてて。

女に弱い。

実家はヤクザ。

勉強だって運動だって私に敵わない。くせに。。。。

アイツと目が合うだけで辛い。

苦しくなる。

アイツが追っている人の姿を見ただけで。

それだけでネガティブになってしまう。

ふさぎ込んでしまう。

いいなあ。。。。

あんなふうにあいつに見てもらいたい。

照れながら。もっと好きって思われながら。

褒めてもらったりしたかった。

素直になりたかった。

彼は私の周りの女子を惚れさせてしまった。
最低クソ野郎だ。

そのくせ私はニセモノだとしても恋人。
なのに、彼は私に熱い視線なんて少しも送ってくれない。

悔しかった。

いつだって見ているのはあの子。

あの子に勝ちたかった。

あの子がいる場所に私が立ちたい。

そうして、その考えが最低で自己嫌悪に陥る。

なまじ頭は悪くない。

否応なく脈なんて無いって知ってる。

一度きりの恋人。

大切に。もっとたくさん思い出が欲しい。

欲しいよ。。。もっとください。私にもっともっと。

切ない。

辛いよ。

でも伝えられない。

私らしくないし。

私が言っただって信じてくれないだろう。

優しいアイツはとりあえずは付き合ってくれるのだろう。

でも、アイツはそんな時でも頭ではあの子に謝ってる。

私は彼から。彼女から。文字通り邪魔者で。
奪ってしまった本人で。
去ってしまえばいいのだろう。

ずっと。ずっと好きだった。

あの頃からずっと。

この心なんて必要ない。

もういらぬのだ。

だって。

だってアイツはあの子を選ぶのだろう。

絶対そうだ。

アイツが好きなのはあの子で。

あの子が好きなのはアイツ。

なんて良い話なのだろう。

クソッ！

物に当たったり。

人に暴力ばかり振るう私なんて女っぽくないし。

好きになつてくれない。

好きになつてくれても、あの子への好きに勝てないんだろう。

だから。だから私が一人で思っていればいい。

ごめんなさい。そして、ありがとう。

ー楽。あなたの事が好きよー